

# 刊行に寄せて

一般的に諸疾患の診断には、病歴や身体所見をはじめ、血液検査、画像検査、機能検査、病理検査など、さまざまな方法が用いられ、これらの組み合わせで最終的な診断を行う。このうち、腫瘍疾患を除けば、移植腎を含む腎疾患の多くは病理診断がきわめて重要な位置を占めている。腎臓は糸球体、尿細管・間質、血管・リンパ管などから成っているが、いずれを主体とする病変においても、病理学的診断は重要である。その方法としては、光学顕微鏡、免疫蛍光法、そして電子顕微鏡による解析が必要であるが、多くの場合これら三者の分析を組み合わせで初めて最終的な病理学的診断が可能となる。さらに、この診断結果は臨床経過や他の検査結果とともに総合的に検討されて、最終診断に至る。このようにしてなされた病理学的診断や最終診断の結果は、膨大な症例数の蓄積とともに情報が整理され、現在では詳細な病型診断や予後推測などに用いられており、現在標準的な診断方法として確立している。

このうち電子顕微鏡により得られる所見はきわめて多彩でかつ情報量も多く、所見の取り方や病態における意義を判断するためには、多くの修練を要するのが通常である。一方で、正常および病的状態での腎組織の電子顕微鏡的解析を行えるプロフェッショナルは、残念ながらごく限られているのが現状である。さらに、具体的な症例に即した実践的な腎臓の電子顕微鏡のテキストはこれまでいくつか試みられたが、十分満足のいくものは完成していない。

このような中で、本書は長年にわたり腎臓内科専門医が腎病理専門医と共同で行ってきた腎病理カンファレンスに供された症例を教材として、腎病理に興味のあるすべての人にとって、わかりやすく、論理的で、かつ臨床との関連性も実際に即して説明されている、大変独創的なテキストである。腎臓学を学ぶ多くの人にとって、待望の書といえるであろう。本書が、多くの人に読まれて、臨床においては腎臓病のより正確な診断の一助になり、かつ病理や研究の分野では、将来腎臓病に興味をもつ研究者を生み出すことになれば大変素晴らしいと思う次第である。

最後に、この大変な労作を世に送り出していただいた、重松秀一先生、両角國男先生、今井圓裕先生はじめ、関係者の皆様には心から敬意を表する次第である。

2016年6月

一般社団法人日本腎臓学会 理事長  
国立大学法人名古屋大学 総長  
松尾 清一

# 序

「腎病理は面白い！しかし、奥が深く難しい」。私は腎臓内科医として長年腎病理診断に携わっていますが、腎病理には日々新たな発見があり、終わりがありません。そこが、腎病理の面白さでもあり、難しさでもあります。本書は、腎臓内科医や腎病理作成技師をはじめ腎病理に関わるすべての人に、腎病理の電子顕微鏡的診断の面白さをわかりやすく伝えるために企画・作成されました。

当教室では、当院および関連病院からの腎生検標本をもとに毎週腎病理カンファレンスを開催し、腎病理専門医の助けを借りながら、腎臓内科医が病理診断を行っています。病理診断は腎病理専門医に任せておけばよいという考え方もありますが、患者の予後や治療方針を考えながら腎臓内科医が腎病理診断に関与することの意義は大きいと感じています。加えて、特に電子顕微鏡に関しては、標本を作製する技師の力量に依存する部分も大きいと思います。腎病理診断では、こうした総合力が試されるのです。

当教室では現在腎生検全例において電子顕微鏡による観察を行っています。そうすると、これまで見えなかったものが見えるようになりました。電子顕微鏡写真を見てから蛍光顕微鏡や光学顕微鏡を見直す必要に迫られることも多く、また電子顕微鏡で予想外の診断がつく症例も少なくありません。今更ながら、腎病理診断における電子顕微鏡の有用性を再認識しています。しかし、いざ勉強しようと思うと、初学者に向けた電子顕微鏡の図譜や解説書が十分でないことに気付きました。そこで、これから電子顕微鏡による腎病理を勉強しようとする方を対象としたわかりやすい図譜を作成したいと考えました。

本書には三つの特色があります。第一は、腎病理専門医ではなく、腎臓内科医あるいは電子顕微鏡技師の視点から作成した電顕図譜であること、第二は、自分たちが実際に診断した症例をもとにしていること、第三に、きれいな部分だけを切り出すのではなく、アーチファクトを含め、ありのままの写真を掲載したことです。こうすることで、読者には電子顕微鏡による腎病理診断を追体験していただきたいと考えています。

本書の作成にあたっては、重松秀一先生には腎病理専門医としての立場から、両角國男先生には長年多くの腎病理診断に携わっている腎臓内科専門医としての立場からご参画いただきました。また今井圓裕先生、松尾清一先生には本書の企画の段階から貴重なご助言をいただきました。関係者の皆様にはこの場をお借りして心より感謝申し上げます。そして、本書が腎病理を学ぶすべての方々のお役に立てることを祈念いたします。

2016年6月

名古屋大学大学院医学系研究科腎臓内科学教授

丸山 彰一